

巫俗言説の形成過程と巫俗の変容に関する研究
—セマウル運動および民主化運動の時期を中心に—

新里喜宣 日本学術振興会特別研究員 (PD)

研究期間：2015年5月1日～2016年3月31日

受入機関：ソウル大 学校人文大学宗教学科

要 旨

本稿は、植民地時代から 1980 年代までを対象とし、巫俗（シャーマニズム）が韓国社会において言及される際に見出される構造、そして巫俗の社会的位相が変化する具体的過程を明らかにすることを目的とした。研究の方法として、『東亜日報』や『京郷新聞』の巫俗言説を詳細に検討することで、韓国社会における巫俗の足跡を辿った。

現代韓国においても巫俗を迷信とみる視点は依然として生き続けている。巫俗に関連した社会的出来事が起こるたび、ムーダン（シャーマン）たちに対する厳しい批判が提起される。他方、巫俗には韓国文化の淵源としての地位も与えられており、教科書や学術書などで巫俗を韓国文化・宗教の源泉として記述することは、ある種の常識となっている。ただ、これは決して古くからあった現象ではない。むしろ、朝鮮時代、あるいは植民地時代にあっても、一部の研究者や文学者を中心として、巫俗がもつ文化的・宗教的価値に目を向けた主体は存在した。しかし、巫俗に関する言説を総体的に眺める場合、彼らのような視点はきわめて限定的なものであった。およそ 1950 年代まで、巫俗を語る言説の軸は「迷信」であった。

巫俗が迷信としてのみ語られる状況に変化が見られるのは、1960 年代である。この時期を境として、研究者の巫俗研究や国家の文化政策が本格化し、これが巫俗を肯定的に描き出す嚆矢となった。1970 年代になると、セマウル（新しい村）運動や山林保護政策によって、韓国社会において巫俗を迷信と捉える機運が再び高まりましたが、他方で、文化公演などで巫俗舞踊が発表されるなど、巫俗を韓国文化の淵源として認める視点は社会的に広く共有されていった。巫俗に関して、1970 年代は「迷信」と「文化」が共存する時期であったと言えよう。

巫俗を迷信とみなす視点は、1980 年代に入ると少数派に属すようになった。この時期になると、巫俗はほぼ肯定的にのみ言及されるようになる。ただ、ここで注目したいことは、巫俗を肯定的に語る場合、その語り口には二つの方法があった、という点である。すなわち、巫俗の歴史性に価値を置く「文化としての巫俗認識」と、巫俗の現在性および宗教性を強調する「宗教としての巫俗認識」である。韓国社会においては前者が圧倒的に優勢だったと考えられるが、文化や民俗という概念を通して巫俗の歴史性に価値を置く視点は、論理的には巫俗を迷信とみる視点と共存可能であった。現在の巫俗は迷信だが、その歴史性には意味がある、という視点である。

反面、巫俗を宗教と捉える言説に関して、このような見解を示す主体の大部分は研究者であったが、巫俗に深く接し、その宗教的世界に魅了された者ならば、自然に抱くようになる視点でもあった。彼らの巫俗認識は、これを迷信としてみる視点は勿論のこと、歴史性のみ価値を置く視点とも衝突する性格をもっていた。巫俗を宗教とみる主体にとって重要なことは歴史ではなく現存する巫俗儀礼、ひいては巫俗の宗教性であったのであり、ここに、迷信と文化と並んで、宗教としての巫俗認識が有する特徴が見出せる。

本稿は、巫俗を韓国近現代史のなかに位置づける試みである。ここから得られる知見をもとに、今後は巫俗言説の構造的な側面、そしてそれらの多様な展開について議論を深めていきたい。

韓国巫俗の近現代

- 新聞から見る巫俗認識の変化 -

1. はじめに

本稿は、植民地時代から 1980 年代までを対象とし、新聞紙上において巫俗が語られる際に見出せる特徴とその変化の位相を探ることを目的とする。

巫俗は「シャーマニズム」とも呼ばれるが、韓国では概して巫俗と称される。これには土着の宗教現象を外来の用語とどのようにすり合わせるか、という問題が含まれているが¹、本稿では韓国および日本における一般的な呼称を踏襲し、巫俗と形容することにしたい。巫俗は韓国の歴史とともにあり続けたといっても過言ではない。近代以前、とりわけ朝鮮時代において巫俗は国家儀礼とも密接な関係性を有し、民間のレベルにおいても、巫俗儀礼は民衆の篤い支持を受けてきた。

他方、巫俗は体系的な宗教組織をもたない、いわば自律的な宗教運動という側面が強く、これによって国家や知識人から激しい弾圧を受ける存在でもあった。朝鮮時代においては「淫祀」、すなわち鬼神に祈りを奉げる、正道から外れた祭祀として批判され、また近代以降は、主に「迷信」として公的領域から排除される傾向にあった。国家、あるいは知識人層による巫俗批判の影響力は甚大であり、巫俗を価値の低いものとする認識は、現代韓国においても脈々と受け継がれている。

人々から求められる存在でありながらも、同時に批判される運命を免れなかったのが巫俗の一貫した歴史であった。しかし、近代、その中でも特に 1960 年代以降は、巫俗にとってやや異なる時代であった点に注目したい。すなわち、国家の文化政策、研究者の巫俗研究が活発化することにより、巫俗の価値が再考される動きが台頭したのである。これにより、巫俗は現代韓国において、一方では迷信として批判されながらも、もう一方では韓国固有の文化および宗教の根幹として位置付けられるようになった。韓国巫俗を考える際に、この相反する視点をどう捉えれば良いのかが、きわめて重い課題となってくる。

巫俗は近現代の歴史において、多様な経験を経て今日に至っているが、その足跡を丹念にたどった研究は未だ提出されていない。むしろ、人類学的な視点をもとに、村落社会と巫俗との関係性²、あるいは民主化運動において民衆の「恨」との関連で巫俗的表象が用いられた点など³、近現代の歴史における巫俗を考察する上で、これらの研究は貴重な知見を提供してくれる。しかし、巫俗の歴史を通時的に整理し、巫俗に対する視点のなかで、何が変わっておらず、どのような点が新しく台頭したのかを、体系的に整理した研究がない点に問題がある。そこで本稿では、主に植民地時代以降の動きをもとに、新聞紙上で巫俗がどのように語られてきたのかを、重要と思われる年度の記事をもとに考察することにしたい。

本稿において主に使用するのは『東亜日報』と『京郷新聞』である。これらは植民地時代、あるいは 1945 年の解放直後から発刊されており、巫俗の歴史を辿る際、何よりも貴重な資料となる。以下では、巫俗が新

¹ 韓国巫俗のもつ特徴の一つとして、「降神巫」と「世襲巫」の分類がある。降神巫は突発的な召命過程を経てムーダン（シャーマン）になった者であり、世襲巫は代々ムーダンの家系で、神が降りるのではなく、主に踊りや歌に特化して巫業を行う。韓国では巫俗、ムーダンといえば世襲巫も含めるのが一般的だが、仮にシャーマンを召命過程を経た者と規定する場合、降神巫だけが該当することになる。つまり、シャーマニズムの範疇から世襲巫が除外されてしまい、概念上の齟齬をきたすのである。このような点に、便宜的にシャーマニズムを巫俗と表記する理由がある。

² 巫俗を学術的に扱った研究のうち、植民地時代の研究としては赤松智城と秋葉隆[1937-1938]、解放以降の研究については崔吉城[1980]や玄容駿[1985]の研究が参考になる。

³ この点については真鶴祐子[1997]や金光億[1991]の研究がその嚆矢として参照に値する。

聞紙上においてどのように語られてきたのかを表で整理し、時系列に沿って考察を進める。新聞という媒体は、これ自体が社会的事実を投影するものではない。言説研究、とくに批判的談話分析の知見が示すように、メディアは現実を反映するというよりも、権力や社会的影響力がある者の発言により、世界に対する見方を変化させる働きをもつ⁴。このような現象は巫俗についても同様であり、新聞で語られることが巫俗に対する人々の視点を導き、ひいては韓国社会における「ムーダン」(シャーマン) たちを取り巻く環境を変化させていったと考えられる。新聞紙上における巫俗表象は、巫俗という宗教現象を構成する、多様な世界の一つであったと言えるだろう。

本稿において筆者が述べようとすることは、以下の通りである。すなわち、植民地時代から 1980 年代まで、韓国社会において巫俗を迷信とみなす視点は一貫して維持されたが、1960 年代になると、研究者の巫俗研究や国家の文化政策が活発になり、少しずつ巫俗の位相が変化していった、という点である。これとあわせ、巫俗を肯定的に捉える視点は、その内容面において、二つに分けて考える必要があるという点も強調したい。巫俗を肯定的に語る場合、まずこれを韓国文化や民俗の源泉と捉える視点があつたが、ここでは現在の巫俗は迷信だが、その歴史性には価値がある、という論法が駆使されることになる。巫俗を文化・民俗とみる視点は、論理的に、これを迷信とみる視点と共存可能であつたのである。他方、巫俗の宗教的な側面に着目し、いわばその現在性に価値を置く視点は、あるがままの巫俗を肯定する姿勢から、これを迷信とみる視点に正面から抵抗する姿勢を有し、ひいては巫俗の歴史性にのみ価値を置く言説も否定するに至つた。巫俗の歴史を考える際、1960 年代から本格化する巫俗に対する肯定的な言説は、決して一枚岩ではなかつたという点に着目する必要がある。

以上のことを明らかにするために、新聞記事をもとに、韓国近現代史における巫俗の位相を確認する。本稿の議論は、一次的には韓国社会と巫俗との関係性についての理解に寄与するものと思われる。しかし、この問題は広い意味での近代化、すなわち近現代の韓国社会において、文化、民俗、宗教がどのような地位を与えられ、如何なる意味を担うことになつたのか、という議論とも関連があるものである。巫俗という、人々の生とともにあり続けてきた宗教現象を歴史のなかに位置づけることは、激動の近現代史における、韓国人の多様な経験を再構成する一つの試金石になると考えられる。

2. 植民地時代および解放直後の巫俗言説

(1) 植民地時代の巫俗認識

植民地時代からおよそ 1950 年代まで、巫俗についてはこれを迷信と見る視点が圧倒的に優勢であつた。巫俗を批判する論理は多様であつたが、李龍範が述べているように、欺瞞行為、経済的損失、医療行為という論理が、巫俗批判の主軸であつたと見ることができ[李龍範 2005:160-163]。巫俗に対する根強い偏見から、人をだまし、浪費させ、間違つた医療行為によって病気をさらに悪化させる原因と捉えられたのである。

この点を示すために、下では『東亜日報』の記事をもとに、1925 年と 1935 年、そして 1949 年の記事を参照する。これらの年において巫俗がどのように言及されたのかを概観することで、植民地時代から 1950 年代までの大きな流れを理解できるようになるだろう。

本稿で使用する新聞資料は、すべてポータルサイト「ネイバー」が提供する「ニュースライブラリー」をもとにしている⁵。本稿では、「ムーダン」という言葉が新聞紙上で用いられる際の日付、題目、作者、内容を整理した。「巫俗」という言葉は学術的な議論において用いられる傾向があり、その社会的な位相を探る際

⁴ 批判的談話分析の視点については、主にジークフリート・イエーガー[2010]の議論を参照した。

⁵ URL は以下の通りである。 <http://newslibrary.naver.com/>

には、巫俗を代表する行為者である「ムーダン」という言葉で検索するのが効率的であるため⁶。
「ムーダン」に関する 1925 年の記事は以下の通りである。

表 1: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1925年)

日付	題目	作者	内容
1/13	迷信	記者	朝鮮社会に巢食う迷信を糾弾する記事。「迷信は理性が許諾しない信念と行事の名称であって、現代思想の程度が容納しない先代信念」であるとし、巫俗もまたその一種であると述べる。
1/17	不平	読者	読者の投稿として、近所にムーダンがおり、大変迷惑であるとして当局の積極的対応を求める記事。
1/20	植物別義一斑	記者	多様な花を紹介し、その花の持つ意味を歴史的な内容と関連付けて紹介する記事。「葵花」の別義がムーダンであると述べる。
2/4	奇談・哀話・珍聞・逸事 (3)	記者	地方に伝わる堂にまつわる話で、そこに関わった日本人がみな死んでしまったエピソードを紹介。突然現れたムーダンが堂に宿る神をなだめるために儀礼を行ったことを伝える記事。
2/8	人面をもった李海昇	記者	ある不幸な死を迎えた人物(李海昇)を紹介する記事で、彼が生前に自らの今後を決めるために、ムーダンを呼んで占いをさせたことを述べる。
2/20 (a)	地方短評	記者	旧正月にあわせて、貧しい者たちがムーダンを訪ね、お金をせびったあげく、留置所に入れられたことを伝える記事。
2/20 (b)	処処片片	記者	ある地方で占い師やムーダンを求める人が後を絶たず、夜を徹して巫俗儀礼が行なわれ、住民の安眠妨害になっているが、これを取締らない警察当局のありようを糾弾する記事。

⁶ なお、記事を検索すると、新聞紙上で連載された文学作品も出てくるのだが、文学作品は一つの記事で完結するものではないため、ここでは省略した。文学作品、とりわけ小説における巫俗表象については、また別の機会に稿を改めて論じたい。

2/27 (a)	教主はムーダンの友達	記者	多くの信者を集めた新宗教教団である「正道教」の教主が、とあるムーダンと親しかったことを伝える記事。
2/27 (b)	喜悲劇片方	記者	上の記事を受けて、正道教が各家庭に大きな被害を与えていることを伝え、ムーダンについても言及。
6/15	緑陰を背にして話す写真 (2)	読者	読者の投稿として、ソウル・南山に昔からあった臥龍堂に関するエピソードを紹介する記事の中で、ムーダンについても言及。
6/19	緑陰を背にして話す写真 (4)	読者	読者の投稿として、ソウル・漢江付近の風景やそこでの経験を自叙伝的に語るなかで、ムーダンについても言及。
7/22	くず入れ	記者	新宗教教団・「大神教」について批判的に伝える記事のなかで、ムーダンが彼らに騙されたことを言及。
8/1	くず入れ	記者	新宗教教団・正道教について批判的に伝える記事のなかで、ムーダンが彼らに騙されたことを言及。
8/7	くず入れ	記者	地方の話として、子供が肺病を患ったためムーダンを呼んで儀礼をさせていた男が、警官に不遜な態度をとって拘留されたことを伝える記事。
10/17	巫女の点卦が殺人	記者	ムーダンに占いをしてもらったところ、息子の寿命が長くないと言われ、息子が死ぬのを見るよりは、自分が先に死んでしまった方が良くと考え、自殺してしまった母親について伝える記事。
11/19	我々の家庭を巻き取る様々な迷信 (1)	記者	朝鮮に深く根付いている迷信を紹介し、その根絶を呼びかける記事。ムーダンについては、家庭で病人が出たとき、病院に行くのではなく、ムーダンを呼んで儀礼をさせていると糾弾。
11/21 (a)	我々の家庭を巻き取る様々な	記者	11月19日の記事を受け、家庭に何か問題があったとき、女性たちがすぐにムーダンを訪ねることを問題視する記事。

	な迷信 (3)		
11/21 (b)	学窓散話	記者	10月には時祭として先祖の墓の前でムーダンを呼んでクツをさせることが多いことを伝える記事。祭祀を批判する論調になっているが、元々は民族のアイデンティティを保存する神聖な儀式だったとも述べる。
11/22	我々の家庭を 取り巻く様々 な迷信 (4)	記者	連載記事のまとめとして、朝鮮で学識高い人も、何か問題がある度にムーダンを訪れて儀礼をさせることを批判。とりわけ迷信が子供に与える悪影響を論じている。
12/6	くず入れ	記者	ソウルの話として、ある慰謝料をめぐって、そのお金でムーダンを呼んで儀礼をさせたことを批判的に伝える。
12/20	収入に従って 予算を組む こと	記者	家庭の柱は主婦であると力説しながら、収入の程度にしたがって支出計画を組む必要性を強調。巫俗儀礼にお金を使うことを浪費と指摘。
12/31	趣味と実益の 新春本誌	記者	李光洙による『千眼記』が1926年から『東亜日報』紙面で連載されることを伝えながら、登場人物たちの職業としてムーダンにも言及。

表を通して、巫俗が植民地朝鮮においてどのような扱いを受けていたのかが窺い知れよう。まず題目に迷信という言葉が挿入されているものとして、1月13日、11月19日、11月21日(a)、11月22日の記事を挙げることができる。また、直接的・間接的に巫俗を批判するものとして、1月17日、2月20日(b)の記事に見られるように、巫俗儀礼による騒音の問題は1945年の解放、そして現代韓国においても見られるものである。巫俗儀礼では朝鮮の伝統的な楽器が多様され、儀礼を盛り上げるためにも音楽が重要な役割を担う。しかし、これは時として人々の安眠を妨げるという逆効果をもたらす場合がある。

その他、2月20日(a)、12月6日、12月20日の記事は経済的浪費の問題、8月7日、10月17日の記事は医療行為の問題として巫俗を批判していることがわかる。騒音の問題と同じく、巫俗を批判する際に参照されるこれら代表的な論理は、解放以降も引き続き巫俗批判の根拠として活用された。

他方、ここで興味深いのは、「類似宗教」(新宗教)批判との関連で巫俗を批判することが多かった、という点である。2月27日(a・b)、7月22日、8月1日の記事は、正道教や大神教と関連付けて巫俗を論じており、7月22日や8月1日の記事のように、直接的に巫俗を批判する記事ではなくとも、これら新宗教教団と巫俗は非常に近いものと認識されがちであった。

植民地時代において、巫俗はほぼ一貫して排除の対象であった。このような傾向は10年後の1935年においても大きな違いは見られない。以下では、1935年の記事を参照する。

表2: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1935年)

日付	題目	作者	内容
1/2	新春移動座談会、我々の病根打診 (1)、迷信病	金活蘭 (教師) /記者	新春企画として、梨專副校長へのインタビュー。朝鮮が近代化するにあたって最も必要なのは生活の科学化であると述べ、生活の弊害としてムーダンを訪ねて儀礼を行うことを指摘。
1/17	民衆を愚弄する宗教類似団体/全朝鮮に百廿七教/教徒が二十万名	記者	朝鮮に数多く存在する宗教類似団体 (新宗教団体) の弊害を糾弾する記事のなかで、ムーダン達の集まりである「崇神人組合」についても言及し、これを無くすよう努力すべきであると強調。
1/23	くず入れ	記者	ある老人が精神に異常を来たし、他に方法がなく、苦渋の決断として、巫俗儀礼に頼ったことを伝える。
1/31	危険な特殊療法/療術取締令作成	記者	危険な医療行為 (療術行為) の弊害を指摘し、電気療法や指圧、精神療法の危険性を訴える記事。朝鮮総督府衛生課においてこれらを取締る方針を打ち出し、その話題との関連で、療術行為はムーダンが人々から金銭を巻き上げるような結果をもたらすため、根絶すべしと糾弾。
2/3	くず入れ	記者	迷信の弊害を伝える記事として、詩のような文体で迷信根絶を訴える。迷信の一つとしてムーダンについても指摘。
2/9	校門を出ていく才媛たちを探して/ 専門編 (12)	記者	才媛たちの活躍する姿を追うシリーズ。医師の卵としてセブランズ病院の内科で実習している女性医師へのインタビュー記事。医療の妨げになっている、ムーダンを始めとする迷信打破の必要性を訴える。
2/11	魍魎の巢窟・	記者	ソウル市内にあった「共済滋養院愛光社」という団体が、実は「霊神会」

	滋養院/霊神会 という看板を 掲げて治病祈 禱で証告		という新宗教団体の本部であったこと、そして、この霊神会がムーダンたちを統一するという目的を持っていることを指摘し、霊神会の教義を批判してこれを根絶する必要性を訴える記事。
2/16 (a)	迷信掃盪とし て巫女に鉄槌	記者	開城に新しい警察署長が就任し、迷信打破運動の一環として大々的なムーダン掃討計画が実施されていることを伝える。
2/16 (b)	阿片密売者/一 網打尽	記者	開城署において阿片密売者の取締りも進めていることを伝え、その一翼を担っているものとしてムーダンについても言及。
3/7	学校費限度拡 張と書堂夜学 誠意指導絶叫	記者	地方における教育費の問題に関する記事であり、これとあわせて、ムーダンを始めとする迷信打破の必要性を訴えている。
3/14 (a)	ムーダン 積極取締り	記者	京畿道においてムーダンのような迷信業者が大変盛んであることを憂い、警察当局が積極的に取り締まる方針を打ち出したことを好意的に報道。
3/14 (b)	慰霊、招魂と 弊害がない 祈禱	記者	上の記事を受けて、警察の方針として、例外的に、一般的な慰霊や招魂儀礼であれば許容するが、医療行為や他人に迷惑をかける巫俗行為が発覚すれば即刻取締ることを宣言。
3/19	家庭婦女をだ まし、金櫛な どを窃取	記者	仁川で起こった事件として、ムーダンが婦女から金の櫛を盗み、警察によって逮捕されたことを伝える。
3/24	くず入れ	記者	天然痘が未だ流行っていることを憂う記事。医療が発達した時代であるにも拘わらず、ムーダンによる医療行為が盛んであることを非難。
4/19	生活の科学化 について	朴吉龍 (建築 家)	知識人によるコラムとして、朝鮮において科学化が未だ十分になされていないことを憂う内容。ムーダンについても、主に医療行為を問題視し、迷信を根絶すべしと強調。

4/20	神位前燭火が 神堂を消失	記者	開城で起こった事故として、ある男がムーダンに儀礼を依頼し、儀礼の最中に火事が発生。迷信打破運動が盛んなときにこのような事故が起こったことを憂う記事。
4/21	横説豎説	記者	印刷術が発達し、ラジオも開発された時代にあつて、ムーダンを呼んで儀礼をさせるなど言語道断であると糾弾する記事。
5/7 (a)	クツを見物し たくて隣家に 放火	記者	ある地方に住む男の妻が、迷信打破運動によってムーダンの儀礼（クツ）が見れなくなったことを残念に思い、隣家に放火してこれを鬼火と思わせてクツが行われるよう仕向けたが、結局、放火の容疑で警察に捕まったことを伝える記事。
5/7 (b)	巫女の「営業 政策」として 放火何と20 余回も	記者	上の記事を受けて、放火犯が実はムーダンであること、自身の生業であるクツができなくなったことを憂い放火に至ったことを伝える。
5/8	横説豎説	記者	上の放火事件を受けて、迷信打破の必要性、そしてムーダンたちは早くちゃんとした職業を見つけて迷信から抜け出すべきと強調。
5/16	病中の前室子 に毒薬を混入 殺害	記者	実子が病気で苦しんでいる最中、ムーダンを呼んで儀礼をさせたところ、病気の原因が夫の前妻との子供と同居している点にあると伝えられ、前妻の子供を殺害しようとしたが、結局、殺人未遂で逮捕されたという事件。
5/27	巫女の祈禱を 今後は絶対 不許	記者	平壤において巫俗が大変盛んである中、警察署がこれまでは民心の安定のためにムーダンの儀礼を放置してきたものの、今後は絶対に許可しない方針を打ち出したことを好意的に報道。
6/11	告祀を行って いた家の天井 から突然人脚 が出現	記者	ある家でムーダンを呼んで祭祀（告祀）をやっていたところ、突然天井が崩れてそこから人の脚が見えたという事件。確証はないが、隣家の会社に窃盗が侵入し、その窃盗犯が逃げる最中に家の上を通り、天井が崩れて脚が見えたのではないかと推測する記事。

6/15	教会堂落成式 中の開教師等 を検挙	記者	「真言宗古義江景教会」という宗教団体が実はムーダンたちの集まりであったことが発覚し、警察が取締ったという記事。
6/25	狂った女子ク ッの台をつか んで	記者	ムーダンが儀礼（クッ）をしている最中に、儀礼でつかっていた台をつかんで気が狂ってしまった女性の話。
6/26	子供の消化不 良症（上）	李先根 （医師）	医師によるコラムとして、衛生観念の未発達を嘆く記事。ムーダンについても民衆の医療知識の不足の一例として言及。
7/7	巫覡はいつま で一万一千名 が尚存	記者	ムーダン・巫覡が朝鮮になお多く存在していることを指摘し、ある調査によればその数が11,687名に達することを述べる。警察法処罰規則などでこれに対応しているが、なお法令面で対策が足りてないことを糾弾。
7/13	迷信とムーダ ンの巢窟/ 「霊光園」/ 撤去要望	記者	京畿道にある新宗教団体「霊光園」が、実はムーダンたちが多く集まる巢窟であることを伝え、警察当局にその取締りを強く求める内容。
7/14	横説豎説	記者	朝鮮の古くからの寄付文化を称賛し、高く評価する記事。これとあわせて、上の記事でも言及されている霊光園について取り上げ、地元住民がその取締りを求めていることを正しい対応だと指摘。
7/15	迷信の徹底 取締	記者	迷信打破運動の必要性とともに「霊光園」について取り上げ、ムーダンの巢窟であるこの教団を根絶すべしと強調。
7/16	金に目がくら み同行した女 子を殺害	記者	ある殺人事件の真相として、女性ムーダンと一緒に山中に行った男が、女性が持っていた金品に目がくらみ殺害してこれを奪ったことを伝える。
7/19	両巫女協力/桃 棒で殺人	記者	精神病患者を桃の木の枝で治療と称して殴打し、死に至らしめた事件の犯人として、二人のムーダンが逮捕されたことを伝える。

7/23	達城公園に巫 ト群/無知な男 女を欺瞞	記者	大邱にある達城公園において、ムーダンや占い師が蔓延して人々を騙して お金をだまし取っていることを糾弾する記事。
8/9	金製の物を持 って行き電車 の中で逢変	記者	あるムーダンが女性を騙して金品を持っていった後、騙されたことに気付 いた女性が追いかけて電車のなかで遭遇、言い争いの末、ムーダンが管轄 警察署で取り調べを受けていることを伝える。
8/12	惨禍の血痕、 暴炎で乾くが 未だの哀話だ け残って	記者	朝鮮で起こった悲劇的な列車事件に関する記事。家族を失った遺族のう ち、実家にいけば福が来るというムーダンの言葉を信じて祖母を訪ねてい たのに、これが災いして子供らを失った男性について伝える。
8/31	青年諸君へ	記者	青年たちの奮起を期待する記事として、迷信打破の必要性を強調。
9/24	稼ぎが芳しく なく、他人の 家に火を	記者	あるムーダンが稼ぎが少なく、「神火」として住民が儀礼を求めてくるだ らうと期待し、放火して捕まった事件を伝える。
10/6	伝承音楽と 広大 (4)	宋錫夏 (民俗 学者)	植民地朝鮮における民俗研究者として名高い宋錫夏による文。京城帝国大 学教授である秋葉隆の研究についても述べながら、広大 (仮面劇) と伝承 音楽との関係を論じ、ムーダンについても言及。
10/15	巫女の妖言を 聞き、娘を捨 てる	記者	ムーダンの言葉を聞き入れ、幼い娘を人の家の前に遺棄した夫婦の話。
10/16	横説縦説	記者	上の記事を受けて、ムーダンの言葉に従って子供を遺棄するなど言語道断 であるとし、迷信の撲滅を訴える。
11/28	八道風光 (9) 古都水原 (7)	洪得順 (西洋)	朝鮮の古都である水原について伝える連載記事。そのなかで数年前にあっ たこととして、子供が水に溺れて死んだためムーダンを呼んで儀礼をした

		画家)	ことを述べる。
12/3	朝鮮人思想における「アジア的」形態について (3)	李清源 (社会主義運動家)	朝鮮の社会構造や階層に関する連載記事。そのなかで職業の一つとしてムーダンについても述べる。
12/21	類似宗教64/ 教徒16万7千	記者	類似宗教 (新宗教) 団体の現況を伝える記事として、巫俗系統の新宗教についても信徒数を述べる。

1925年の記事をまとめた表1よりも、「ムーダン」への言及数が圧倒的に多いことがわかる。また、「迷信打破」というスローガンが、1925年よりも強力に押し出されている点も興味深い。単純な比較は難しいが、1925年の段階よりも、社会が迷信打破に自覚的になっている姿がうかがえる。

まず題目に迷信という言葉が含まれているものとして、1月2日、2月16日 (a)、7月13日、7月15日の記事がこれに該当する。また、新宗教との関連で巫俗を批判するものとして、1月17日、2月11日、6月15日、7月13日、7月14日、12月21日の記事では、新宗教批判の傍ら、巫俗も同様に否定的な論調で語られている。

他方、1935年は、巫俗を批判する論理のうち、医療行為という根拠のもと、巫俗を批判することが多かった点に特徴がある。直接的・間接的に巫俗の医療行為を批判する記事として、1月23日、1月31日、2月9日、3月24日、4月19日、5月16日、6月26日、7月19日の記事を挙げることができる。それぞれ内容は多様だが、巫俗儀礼のうち、医療行為が最も問題視されていたことがわかる。

さらに、1935年の記事では、警察当局の巫俗に対する締め付けが活発になった点が顕著にあらわれている。代表的な記事として、2月16日 (a・b)、3月14日 (a・b)、3月19日、5月27日、7月7日などの記事では、警察によるムーダンの取締りの強化、あるいはこれを促す論調で迷信打破の必要性が説かれている。ただ、いくつかの先行研究で述べられているように、巫俗を迷信として取締る当局の対応は、二重の意味をもつものであった。つまり、朝鮮が近代化を成し遂げる上で巫俗をその障害とみなし、これを根絶しようとする姿勢をみせた反面、巫俗を「必要悪」として、これを無理になくそうとすると民心の混乱を招来し、統治を円滑に進められなくなるため、放置しようとする動きも見られたのである⁷。積極的に取締りをすると豪語する反面、実はさほどの成果を上げていないのは、このような矛盾した姿勢によるものだと考えられる。

その他にも、5月7日 (a・b)、5月8日、9月24日の記事のように、儀礼をやるために自ら放火事件を起こしたムーダンについて否定的に論じるなど、1935年においても、巫俗を形容する単語は基本的に「迷信」であった。このような傾向は1950年まで続く。しかし、ここでは、1960年代以降の動きをあらかじめ抑える上で、10月6日の記事に注目してみたい。この記事は朝鮮民俗学の創始者として名高い宋錫夏(1904-1948)による文章であるが、巫俗が否定的にのみ論じられる状況にあって、ほぼ唯一と言ってよいほど、巫俗を中立的に描いている。ここで宋錫夏が巫俗について言及しているのは、朝鮮の伝承音楽を語る上で、ムーダンが奏でる音色が無くてはならないものであるからである。

⁷ 巫俗に対するこのような相反する姿勢については、宮内[2012]の研究がもっとも参考になる。また、川瀬[2015]の研究も、植民地時代における知識人たちの迷信観を探る上で、重要な知見を提供している。

今日の韓国において、巫俗が伝統文化と深い関連性を持つということは、ほぼ常識として定着している。ただ、これは比較的近年に定着した認識であって、少なくとも植民地時代に巫俗を中立的ないしは肯定的に語る主体は、研究者あるいは専門的な知見を備えた一部の知識人たちに限られていた。その代表的な論者として、李能和（1869-1943）、崔南善（1890-1957）、孫晋泰（1900-?）などの民俗学者、あるいは文学者である金東里（1913-1995）を挙げることができる。とりわけ金東里は『巫女図』（1936年発表）という作品を通して、排斥の対象でしかなかった巫俗の宗教的世界観を鮮やかに描いてみせた。大変早い時期から巫俗のもつ文化的、宗教的価値に目を向けていた碩学の視点は、解放後の韓国において巫俗が再考されるなかで、貴重な知的財産になったと考えられる。

とはいえ、ごく少数の例外を除き、およそ1950年代まで、巫俗はほぼ迷信としてのみ語られていた。1950年代は朝鮮戦争による社会的混乱の影響からか巫俗に対する言及が少ないため、以下では解放直後である1949年の記事を参照してみたい。

（2）解放後から1950年代の巫俗認識

表3：『東亜日報』「ムーダン」検索結果（1949年）

日付	題目	作者	内容
4/20	迷信を打破しよう	読者	読者の投稿。原子爆弾が開発され、火星に行こうとする時代にあって、ムーダンのような迷信を信じることは許容できないと糾弾。
7/4	くず入れ	記者	入試時期に父兄がムーダンや占い師を訪ねて入学の可否を占ったりすることは、未開の象徴であると批判。
7/10	医師の開業試験制/都市集中防止策として保健部が実施計画	記者	ソウルをはじめとした都市に医師が集中するなか、農村部では未だにムーダンをはじめとした「原始的」な医療行為に依存している実態を改善する必要性を訴える。具体的には、現行の開業許可制を維持しつつ、各地方ごとで開業試験制を別個に運営することを提起。
8/22 (a)	八百無医村に医師配置/建物提供薬品特配 二大特典	記者	農村における医療制度の未発達を改善するために、地方で開業する医師に対して、国家から特別な支援を行っていることを述べる。農村の医療制度未発達の象徴としてムーダンについても言及。
8/22 (b)	廿世紀の謎、奇怪！話す花	記者	「太主」とは幼い子供が死んで鬼神となったもの。ソウルで太主に対する信仰が根強く、ある家で死んだ子供が花瓶を通して話しかけるといふ奇怪

	瓶迷信の魔殿、東大門「太主」の家		な現象が起こり、それが話題となって多くの人々がその家を訪れていることを伝える。太主を崇拜するのは主にムーダンたちであると言及。
8/30 (a)	ムーダン、占い師激増	記者	根強い巫俗信仰を批判し、ムーダンや占い師による預言に多くの人々が引き付けられている現状を悲観視する記事。
8/30 (b)	露天占い師を一掃/観相師は登録実施	記者	占い師やムーダンを一掃する方案を考える記事として、治安局保安課長の言葉を参照しながら、国家の側でどのような対応が必要かを考察。
9/8	脳炎が各地を掩襲！	記者	開城で流行していた脳炎がソウルにまで範囲を広げていることを憂慮し、早急な対応を求める記事。あわせて、医療行為としてムーダンに儀礼を求めることを戒めている。
9/16	くず入れ	記者	脳炎が流行するなか、ムーダンや占い師に対する需要が高まっていることを批判する記事。「迷信打破運動を逆行」するものと糾弾。
9/25	姿をくرامす観相師たち/10月10日より迷信打破週間	記者	生活改善運動の一環として、ソウル市を対象として10月10日から一週間を迷信打破週間とし、ムーダン組合や占い師たちを一掃する計画であることを伝える。
9/26	くず入れ	記者	迷信打破週間の実施を伝える記事。迷信打破の必要性は十分にうなずけるが、迷信を求める市民の側の意識改革が緊要であると述べる。
9/30	くず入れ	記者	迷信打破週間が始まるのにあわせ、警察と協力して、ソウル市がムーダンや占い師たちに対する基本調査を行うことを決定。
10/10	科学的な生活をしよう	記者	迷信打破週間における市民の自覚を喚起し、科学に対する信頼をもとに、迷信を打破する必要性を強調。

10/11	ムーダン組合 等解散	記者	迷信打破週間の様子を伝えながら、警察がムーダンたちの組合を解散させることを決めたと報道。
10/15	卜術とは何か 盲人たちが話 す正体	占い師 たち	迷信打破週間の一環として、文教部教育局長による司会のもと、実際に占い師たちに話を聞いてみようという開かれた懇談会の様子を伝える。ムーダンについても迷信として言及。
10/18	賭博行為厳罰	記者	ソウル市警察局長の記者会見の内容を伝える記事。賭博行為を厳罰に処すこととあわせて、迷信業者の取締りを強化すると宣言。
10/19	くず入れ	記者	10月17日に卜術組合長と盲人協会副会長がソウル市庁を訪れ、迷信打破に協力する代わりに、他の職業を斡旋してくれと懇願したことを伝える。ムーダンや占い師も、これを迷信とわかっているが生活のために仕方なくやっていると同情的に報じ、彼らの生活補助が緊要であると述べる。
12/11	水原「華寧殿」 重修/洞民と韓 青年の美挙	記者	1945年の解放後、水原の文化財が放置状態にあつて毀損の危機にあつたが、住民や大韓青年団員たちが率先して修理したことを伝える記事。ムーダンについては無断で文化財を宿舎として使っていたと批判。
12/30	己丑年の空手 票/「新生活編」 /宣伝費だけ使 い迷信打破は 口号のみ	記者	一年を振り返る記事として、迷信打破週間について反省的に述べている。国家はキャンペーンで多額の宣伝費を使ったが、該当時期が終わると、すぐにムーダンや占い師が盛況を呈するようになったと伝える。一時的なキャンペーンで終わるのではなく、彼らの新しい職を提供するなど、恒久的な対策が必要であると強調。

表を通して、1949年の段階では、巫俗に対して、基本的に植民地時代と異なる点は無かったことがわかる。植民地時代と同様に、7月10日、8月22日(a)、9月8日、9月16日の記事では、ムーダンによる医療行為を迷信として扱っている。7月4日の記事のように、入試と巫俗との関連性についての言及は植民地時代には見られなかったものだが、これを「未開」として否定的に論ずる点においては、植民地時代と大きな違いはないと言えよう。

1949年の記事の大半は、「迷信打破週間」として巫俗やト占を批判するものであった。このようなキャンペーンは1950年においても持続的に行われた。たとえば1953年には「迷信打破強調週間」として巫俗や占いが排除の対象となったが、これらはどちらかと言うと散発的な動きであった反面、1949年の迷信打破週間は国家や知識人、新聞社が、積極的に巫俗やト占を根絶しようとして働きかけたという点に特徴がある。9月25

日から10月19日までのすべての記事において迷信打破週間の意義が語られており、相当な規模で迷信業者を排除しようとする運動が展開されたことがわかる。他方、12月30日の記事で述べられているように、植民地時代の迷信打破運動と同じく、規模の大きさに比して、さほど目立った成果を上げることができなかった点も、解放以前の迷信打破運動と軌を一にしている。

迷信として巫俗を否定的にのみ語る傾向は、1950年代においても目立った変化はなかった。巫俗を取り巻く社会的状況に明確な変化が見られるのは1960年代であった。しかし、1950年代においては一つ、見逃せない動きがあった点は強調しておきたい。それは、1958年から「全国民俗芸術競演大会」がはじまったことである。この大会は大韓民国政府樹立10周年を記念して、全国の民俗芸術を発掘し、称えることを主旨とするものであった。その第一回目の受賞演目（個人賞）として、「ムーダンの踊り」（慶尚南道）が選定されるに至った。これは巫俗の歴史を考える上で、きわめて重要な意味をもつ。それまで迷信としてのみ語られていた巫俗について、その民俗的価値を認める動きが台頭し始めたことを意味するためである。むしろ、これをもって巫俗への弾圧が止んだわけではない。ただ、1960年代以降に本格化する、巫俗に対する肯定的な視点の登場には、国家の文化政策において巫俗がお墨付きを与えられた点が深く関わっている。以下では、巫俗認識において明確な変化が認められる、1960年代の巫俗言説を確認してみたい。

3. 1960年代から80年代までの巫俗言説

(1) 迷信としての巫俗認識

巫俗の歴史を考える上で、1960年代は最も重要な時期であったと言って良い。前述した国家の文化政策、そして研究者の巫俗研究が活発化し、韓国社会における巫俗の位相が明確な変化を迎えるためである。この変化は、1960年代前半と後半の記事を比較することで、より鮮明にあらわれる。以下ではまず、1962年の新聞紙面において、「ムーダン」がどのように語られたのかを見てみよう。

表4: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1962年)

日付	題目	作者	内容
3/14	漁民達の 鎮魂祭	琴東媛	ある漁村の生活を紹介する記事。「無識で伝統的な儀礼」について述べながら、ムーダンの儀礼についても言及。
9/8	くず入れ	記者	地方において行われたムーダンの儀礼について述べながら、「全ては無知が有罪」と指摘する記事。
9/11	健康(4) / 「クッ病」に一言	金弘基 (医師)	医師によるコラム。病気を治療するためにムーダンの儀礼であるクッに依存することを批判し、「でたらめな治療」と糾弾。
9/13	子供を産めない女性の悲哀	読者	読者の投稿。不妊症に苦しむ女性の悲哀について述べながら、ムーダンの儀礼に依存することを「とんでもないこと」として批判。
10/9	ムーダンが沸	読者	読者の投稿。巫俗を迷信とみなしこれを厳しく非難。

	き立つとは		
10/10	横説縦説	記者	上の記事をうけて、新聞社の社説として巫俗を糾弾。
10/20	優れた才能	金ヨン ジュ	美術評論家によるコラムとして、絵画の展示会に関する話から「ムーダンたち」という作品があることも言及。
11/12	就業女性 わずか9%!	記者	女性の社会進出に関する記事として、高等教育をうけた女性のなかにもムーダンになる者がいるとし、就職環境改善の必要性を訴える。

表を通して、1962年の段階では、まだ以前の時期と同じく、巫俗を否定的に捉える視点が圧倒的に優位に立っていたことがわかる。例外的に10月20日の記事では絵画と巫俗の関係性について触れられているものの、それ以外の記事は巫俗を批判し、根絶しようとする内容であった。3月14日、9月8日、9月11日、9月13日、10月9日、10月10日の記事はすべて巫俗を批判するものであり、11月12日の記事のように、巫俗を直接的に批判するものではなくとも、ムーダンになることを「高等教育を受けた女性たちが活発に社会参加できていない実状」として論じるなど、巫俗の社会的地位を低いものと捉えていることがわかる。巫俗を迷信と見なす主体として、新聞社はもちろん、医師や一般読者の文章も目立ち、1960年代初頭の段階では、このような認識が韓国社会において依然として広く共有されていたことが窺える。

植民地時代から続く、巫俗を否定的に捉える視点は、1960年代後半から明確な変化を示すようになる。下では、1969年の記事を概観する。

(2) 文化とみる視点の台頭

表5: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1969年)

日付	題目	作者	内容
1/28	辛苦の 人間文化財	記者	人間文化財制度の問題点を指摘する記事として、朝鮮の民俗芸能である仮面劇に関する話から、そこで登場するムーダン役についても言及。
2/8	服打令	梁重海	大学教授による衣服に関するコラム。巫服（ムーダンが着る服）は職業および身分をしめす機能を持っていると指摘。
3/27	一か月内に壊 される国師堂	記者	朝鮮に古くから伝わる堂舎であるソウルの国師堂を壊そうとする国家の施策に対して、国立博物館美術課長である崔淳雨、そして民俗学者である張籌根の言葉を引用して国師堂の民俗的価値を強調、あわせて巫俗研究を進める上でも国師堂が必要不可欠であると述べる。

4/15	新人舞踊発表 会/15日国立劇 場において	記者	舞踊発表会に関する記事であり、「ムーダンの踊り」も発表される予定であることを伝える。
4/19	諸神の故郷(2) /巫系	記者	巫俗とは如何なるものであるのかを詳細に伝える記事。民俗学者・任哲宰や人類学者・崔吉城の意見も参照しながら、巫俗を学術的に論ずる。
4/29	韓民族の文化 起源/民族学か らみた南方性	李光奎 (人類 学者)	人類学的観点から韓民族の文化的起源を考察するコラムであり、巫俗も文化的起源を考察する上で重要なテーマであると指摘。
7/7	長官公開謝罪 要求/「成大生 殴打」糾弾	記者	朴正熙政権への学生たちの抵抗運動の最中、警察官による成均館大学学生殴打事件が発生、同大の学生たちが謝罪を要求する行事として「鬼神が憑いた改憲推進委員打破のムーダンクツ」を催したことを報道。
7/14	進水遊戯の船 が転覆、9名が 溺死	記者	船の進水式としてムーダンの儀礼が行われていたところ、これが転覆してムーダンとともに9名が死亡したことを伝える。
8/21	神市ソウル	法頂 (僧侶)	ソウルにおいて巫俗やト占が盛んであることを指摘し、これを迷信として批判するコラム。
8/23	くず入れ	記事	あるムーダンが詐欺等の容疑で逮捕されたことを伝える記事。
9/8	くず入れ	記者	地方で虎が出現、これに驚いた住民たちがムーダンを呼んで儀礼をさせたことを伝える記事。
10/2 (a)	莫重な一票の 動静(中)/ 票あつめ	記者	朴正熙政権による改憲案をめぐる選挙活動が熱を帯びるなか、ムーダンたちの団体である「正道会」が団結大会を開いたことを報道。
10/2 (b)	迷信/ソウルの 人がより好む	記者	保健社会部の統計資料をもとに、農村よりもソウルの方がむしろムーダンを訪れる人が多いことを伝える。

10/10	ムーダンなど 祈禱祭典	記者	ムーダンたちが集まって結成された団体である「大韓易道人」が、文化公報部および韓国反共連盟の後援を得て、「勝共統一促進民族団結記念凡易人大祈禱祭典」を開いたことを伝える。
10/14	カウントダウン 三日間	記者	国民投票直前の様子を伝えながら、10月2日 (a) の記事と同じく、正道会の団結大会について伝える。
11/4	横説堅説	記者	当時の政治的状況を批判的に伝えながら、政治の影響力がたいへん大きく、ムーダンの儀礼にも政治の影響が見られると指摘。
11/11 (a)	韓国シャーマ ニズム再検討	記者	韓国巫俗を主題とする学術大会の様子を伝え、崔吉城、柳東植、張秉吉など、巫俗に関する代表的研究者の発表内容を詳細に報道。
11/11 (b)	文化人類学会 発表会	記者	韓国文化人類学会第52回発表会についての広報文。崔吉城、玄容駿、金光日、任哲宰などによる巫俗関連発表内容を伝える。
11/20	くず入れ	記者	あるムーダンが詐欺罪で捕まったことを伝える。
12/22	犬が白丁を かみ殺す	記者	ガーナにおいて白丁（畜殺に従事する人）が犬にかみ殺される事件が発生、自らを殺す白丁に対する犬の憎悪に対する恐怖から、住民たちがムーダン（シャーマン）を呼んで犬の怒りを鎮める儀礼をさせたことを伝える。

本稿の議論とは直接的な関連性を持たないが、1969年になると、選挙と巫俗との関係についての記事が始める点が興味深い。10月2日 (a)、10月10日、10月14日、11月4日の記事では、ムーダンが選挙に積極的に関わる姿が伝えられている。これと同様の現象は現代韓国においても見られ、選挙の度に政治家がムーダンを訪ねて吉凶を占うことは、社会的によく知られる暗黙の了解となっている。

他方、1969年の記事は、62年とは異なる側面を示している。それは巫俗について言及する主体の変化、そして内容面の変化である。1962年の記事で巫俗について語る主体は記者の他に、医師や文化人であったが、1969年では研究者の名前が多く見受けられる。2月8日、3月27日、4月19日、4月29日、11月11日 (a・b) の記事はすべて研究者によるものである。この中でも、3月27日の記事では民俗研究、とりわけ巫俗研究の必要性を強調し、国家の施策を批判する研究者の姿が見出せる。また、11月11日 (a) の記事「韓国シャーマニズム再検討」では、巫俗が民俗研究の中心的主題となっている点が確認できる。このような傾向は、11月11日 (b) の記事「文化人類学会発表会」においても同様に見出せる。これらは、1962年の段階では未だ本格化されていなかった巫俗研究が、学術界において定着していく過程を示している。

4月19日の記事もまた、研究者の巫俗認識を強く反映するものとなっている。この記事は韓国に根強く残る巫俗的伝統を伝えるものであり、肯定でも否定でもない形式で、巫俗について客観的に論じている。この際に参照されたのが任哲宰や崔吉城など、当時巫俗研究を積極的に推進していた民俗学・人類学者であった

点に注目したい。

あわせて、1960年代後半は、巫俗に対する社会的関心が少しずつ高まり、巫俗がもつ文化的要素に着目した公演や文化的行事が催されはじめる時期でもあった。たとえば、4月15日の記事で紹介されている公演会は、その後の時期において頻繁に言及されることになる「ムーダンの踊り」が登場する萌芽的な行事として位置付けられよう。また、7月7日の記事では、成均館大学の学生たちが抵抗運動としてムーダンの踊りを演じたことが伝えられている。巫俗を迷信としてのみ捉えていた韓国社会が、その文化的・歴史的価値に自覚的になりつつある姿が映し出されている。

整理すると、1960年代は巫俗を迷信としてみる視点が社会的に広く共有されていた反面、研究者の巫俗研究が本格化することにより、文化公演や行事において巫俗の文化的要素が表現され始めた時期でもあった。このような点を踏まえ、次は1970年代の巫俗関連記事を確認してみよう。

(3) セマウル運動の衝撃

大きな流れとして、1970年代は、セマウル（新しい村）運動や山林保護という観点から、依然として巫俗を迷信とみなす姿勢が維持された反面、研究者の巫俗研究のみならず、巫俗を主題とした公演や文学作品が登場するなど、巫俗を韓国文化の根幹をなすものとみなす視点が強く台頭した時期でもあった。この点を確認するために、まずは1972年の記事を確認する。

表6: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1972年)

日付	題目	作者	内容
1/27	怪火騒動8箇 月の間に33回 も発火	記者	原因不明の火事が乱発し、住民たちが怖がってムーダンを呼んでクツをさせたことを報道。
2/10	KBS 「極盛婦人」	記者	テレビドラマの予告欄において、ムーダンを訪ねて儀礼をさせる場面が登場することを伝える記事。
2/14 (a)	弊習 (1) / 急行料	記者	韓国になお残っている弊習を論じる記事として、ムーダンを呼んで儀礼をさせることをその一つとして言及。
2/14 (b)	合理的な人間 教育と下意上 達の政治を/そ の処方	任哲宰 (民俗 学者)	同日の記事である「弊習 (1)」を受け、慣習が制度化されそれを強要するようになってはダメだと論ずる。ムーダンの儀礼も慣習の一つとして言及。

2/22	「半獣」という偏見のなかで消えていく アイヌ族	記者	日本のアイヌ族の歴史と現況を伝える記事として、アイヌ族のシャーマンについても言及。
2/29	弊習 (3) / 占い	記者	韓国に残っている弊習として、ト占を集中的に扱う記事。金光日、文相熙、崔吉城など、研究者の意見も参照しているが、基本的にはト占や巫俗を批判的に論じている。
3/4	ムーダン・占い師取締令/忠 清道警	記者	軽犯罪処罰法を適用し、医療行為をするムーダンや占い師を取締ろうとする警察の動きを伝える。
3/23	文明の 死角地帯	洪起三 (文学 評論家)	インドの現況を批判的に伝える記事として、ヒンドゥー寺院を卑下しながら、これをムーダンの儀礼と比較して述べる。
4/3	弊習 (8) / クッ	記者	弊習として、ムーダンの儀礼であるクッを集中的に扱う記事。宗教学者である柳東植の説明を添えながら巫俗の歴史を詳細に説明。ただ、結論として、巫俗を時間がかかっても根絶しなくてはならない慣習と指摘。
4/6	「セマウル」 を行く (1)	記者	朴正熙大統領が主導した農村改善運動・セマウル (新しい村) 運動が本格化するなか、地方の状況を伝える記事。ムーダンについては社会で依然として残っている迷信として言及。
4/15	漢城とソウル (11)	記者	三清公園の昔の風景を伝える記事であり、周辺にムーダンや占い師が多く居住していたことを言及。
4/19	くず入れ	記者	セマウル運動の現況を伝える記事として、村の守護神的な堂舎である城隍堂やムーダンの家を壊す姿を報道。
4/26	精神病患者鞭撻 致死/放浪のム	記者	ムーダンが精神病患者を治療しようと鞭で打ち、結局その患者を死なせてしまったことを伝える記事。

	ムードン二人を 拘束		
5/25	舞協「創作」 舞踊公演	記者	韓国舞踊協会が主催する公演で、幾つかの演目とともにムードンの踊りも発表されることを伝える。
6/12	民俗仮面劇の 大祭典	記者	東亜日報社が主催する文化講演に関する広報。仮面劇の主要登場人物としてムードン役があることも言及。
7/12	常緑樹青年と 妨害するムードン	記者	TVドラマ「水神祭」でムードンが登場することを伝える。
9/13	昔の「円覚寺」 の再建、夢を 抱いて	記者	民俗芸術を継承していく必要性を強調し、ムードンの踊りについても言及。
9/15	恥ずかしがり 屋な花卉のよ うに	記者	韓国民俗芸術団の公演とそれに対する外国紙『タイムズ』の評価を伝えながら、公演されたムードンの踊りが高評価を得たことを述べる。
10/3	弊習 (26) /俗 説と妄信	記者	韓国に依然として残っている弊習として、俗説と妄信に関する内容を伝えながら、ムードンについても言及。
10/14	西歐式書芸典 を開いている リーグ女史	記者	米国の大学教授でありながら画家でもあるリーグ女史が開いている展示会の内容を伝える記事の。作品の一つである「ムードン」についても言及。
12/1	生活合理化を 提唱する	記者	社説として、家庭儀礼準則の内容を紹介しながら生活合理化の必要性を強調。巫俗やト占についても厳しく批判。

「弊習」という否定的な題目のもと、2月14日(a)、2月29日、4月3日、10月3日の記事では、巫俗を迷信または根絶すべき対象として描いている。12月1日の記事では、生活合理化、そして朴正熙政権によって推進された家庭儀礼簡素化のための「家庭儀礼準則」(1969年施行)などのスローガンのもと、巫俗をその障害として述べている。このように、巫俗を否定的に捉えようとする記事の背景として最も重要なこと

は、1972年から本格化した「セマウル（新しい村）運動」である。4月6日の記事では題名に「セマウル」という言葉が挿入されており、セマウル運動において巫俗がその主たる攻撃対象であった点が確認できる。セマウル運動は農村改革運動として、解放後の韓国において最も強力に推進された社会運動であった。そこで迷信として烙印をおされたことは、現代においても、ムーダンたちにとって消すことのできない悪夢として記憶に鮮明に刻み込まれている⁸。

セマウル運動との関連で巫俗を批判したのは『東亜日報』だけではない。例として、『京郷新聞』の記事を確認してみよう。

21日は第5回科学の日。科学時代を生きる現代人の生活には、余りにも非科学的な要素があふれている。まめまめしく生きてみようとすするセマウル運動が積極的に推進されているのに、果たして私たちの生活はどの程度科学的になったのか？

（中略）未だ健在なムーダンの儀礼が社会の一部で通用しており、とくに農村では60%ほどの精神病患者が迷信治療に依存している。生活の非科学的な要素が多いことは、国民の科学知識の不足も一つの要因として指摘できるが、政府や社会団体が、国民に科学的思考様式を植え付ける上で消極的であった点も、生活科学者たちが指摘するところである。⁹

セマウル運動を推進する国家に呼応するというよりも、より積極的にこれを主導していこうとする氣勢が感じられる文章である。迷信として巫俗が挙げられており、これを根絶できていない農村と、そこに住む人々に対して遺憾の念が表明されている。セマウル運動を推進したのは国家であったが、新聞社もこれに劣らず農村改革の必要性を訴え、巫俗の弊害を指摘していった。

以上の通り、1972年において巫俗を迷信として糾弾する記事の大部分は、セマウル運動を意識していたことが確認できる。ただ、1960年代からあらわれた傾向として、巫俗がもつ文化的要素に着目した公演や展示会が持続的に開かれていったことも、あわせて指摘する必要がある。むろん、2月10日、7月12日の記事から確認できるように、テレビ番組においてムーダンが登場するようになったことも時代の変化として興味深い。何よりも、6月12日の記事から見て取れるように、セマウル運動に共鳴して巫俗を根絶しようとしていた東亜日報社が主催する演劇において、ムーダン役が登場することに注目したい。また、5月25日、9月13日、9月15日の記事においてムーダンの踊りが言及されている点も、この時期の特徴として指摘できる。文化公演においてムーダンの踊りが登場することは、1970年代の韓国社会において、何ら違和感のない日常の風景となっていた。

1972年の巫俗関連記事は、これを迷信および文化として見る視点の共存であったと整理できるだろう。このような傾向は1970年代後半においても確認できる。下では、1978年の記事を確認してみよう。

（4）迷信と文化の共存

これまでは基本的に『東亜日報』の記事をもとに議論を展開してきたが、1978年については『京郷新聞』の記事を参照してみたい。筆者は巫俗に関して、『東亜日報』1978年の記事も確認したが、この年に関しては、『京郷新聞』の方が韓国社会と巫俗の関係性をよく反映していると思われる。

表7: 『京郷新聞』 「ムーダン」 検索結果 (1978年)

⁸ たとえば、韓国の国巫として名高い金錦花[2014]の自叙伝では、セマウル運動が巫俗に携わる者たちにとって、どれだけ大きな障害として立ちはだかったのかが随所に述べられている。

⁹ 「惜しい生活の科学化」、『京郷新聞』、1972年4月20日。

日付	題目	作者	内容
1/10	ハワイ 移民75周年 記念	記者	韓国人によるハワイ移住が75周年にあたることを記念して、民俗芸術団がムーダンの踊りを披露したことを伝える。
1/27	王陵奉祭祀、 すべて復元	記者	朝鮮王朝の王室祭祀をしっかりと保存しなくてはならないとする意見を伝える記事。専門家による「ムーダンのクツも文化財として保護されているのに、朝鮮王朝文化の最高結晶である王室文化財保存には熱意が不足」しているという言葉引用。
2/14	ノルウェー 芸術団	記者	ノルウェー芸術祭について紹介する記事。作品「ムーダン」についても言及。
2/20	無等山、殺害 犯、控訴棄却	記者	光州にある無等山で、許可を得ずに勝手に家を建てた母子家庭があり、市の職員がこれを撤去しようとしたところ息子が抵抗、市の職員を殺害した事件。当時、無等山はムーダンの巣窟として報道され、一家は何の根拠もなくムーダンの一味であると非難されたが、その裁判において被告人の控訴が棄却されたことを伝える記事。
2/21	31回カンヌ国 際映画祭に華 麗な外出、草 墳出品	記者	カンヌ国際映画祭において韓国映画「草墳」が出品されたことを伝える記事。映画の内容について紹介しながら「現代のムーダンたちの虚構を暴く作品」であると述べる。
3/3	インタビュー	記者	パンソリ（伝統的な民俗芸能）の大会として、朝鮮王朝時代から伝わる大私習大会において、大統領章をうけた成又香女史がパンソリについて語りながら、比喩としてムーダんに神が降りた状態についても言及。
3/6	文壇長老・金 東里氏が	記者	植民地時代から、『巫女図』など巫俗に関しても著名な文学作品を多く書き続けてきた金東里が、久々の長編小説として『乙火』を発表したことを

	「乙火」発表		伝える。金東里の言葉も引用しながら、巫俗の世界観について言及。
4/8	序論	李鍾祥 (画家)	画家による、絵画を鑑賞する態度についてのコラム。 望ましい態度の一つとして、ムーダンに神が降りた状態を挙げる。
5/15	未堂世界放浪 記詩想に従っ て散文の道	徐廷柱 (詩人)	リオデジャネイロの舞踊について紹介するコラム。 比喩としてムーダンに神が降りた状態を挙げる。
5/31	ラビ・シャン カル・シター ル演奏	記者	韓国舞踊の発表会において、ムーダンの踊りも披露されることを報道。
7/17	新作映画「メ ドューサ」	記者	映画の内容を紹介しながら、ホラー映画の一例として『エクソシスト』（韓 国語版では『ムーダン』という題名）についても言及。
7/19 (a)	南道国楽の根 っこ「シッキ ムクツ」再現	記者	珍島の巫俗儀礼として著名な「シッキムクツ」再現発表会に関する記事。 舞踊学者・鄭炳浩の言葉も引用しながら、巫俗およびシッキムクツについ て詳細に説明。
7/19 (b)	音楽界に新し い流行語、「輸 出」と「創造」	記者	音楽界の動向を伝える記事として、ムーダンという曲があることにも言及。
7/25	MBC 「第3教室」	記者	ドラマ「ムーダンの娘」の内容紹介。
8/3	インタビュー	記者	民俗芸術団の海外公演に関する記事であり、韓国舞踊としてムーダンの踊 りを披露することを伝える。
8/9	年内総選挙 可能性対備	記者	李哲承・新民団（政党）代表最高委員の演説内容を伝えながら、彼が話の 比喩としてムーダンという単語に言及したことを指摘。

8/22	尤庵先生の 「戒女書」 出版	記者	朝鮮時代後期の文官、学者である尤庵・宋時烈の文章が現代韓国語に翻訳されたことを伝えながら、彼がムーダンとその儀礼を迷信と見なしてこれを戒めていたことを指摘。
9/19	自然も健全意識もむしばむ 「信仰無法」 の現場 (1)	記者	朴正熙政権後期になって本格化した山林保護政策に関する記事。巫俗や新宗教団体が朝鮮の霊山として名高い鷄龍山の環境を破壊し、不法な医療行為を施して人々の生活を脅かしていることを指摘。
9/21	顔が見えない 類似宗教	記者	上の記事と同じ趣旨のものであり、類似宗教（新宗教）団体による鷄龍山での迷信行為を糾弾する記事。ムーダンについても批判的に言及。
9/25 (a)	自然も健全意識もむしばむ 「信仰無法」 の現場 (5)	記者	9月19日の記事を引き継ぎ、ここではソウル近郊の三角山や道峰山における迷信行為を糾弾。巫俗についても批判的に言及。
9/25 (b)	ムーダン/ 山神閣、二箇所撤去	記者	韓国の寺院に必ずと言って良いほど設置されている山神閣（山神をまつた堂）に関して、ソウル市が三角山の山神閣を撤去したことを報道。
9/28	自然も健全意識もむしばむ 「信仰無法」 の現場 (7)	記者	9月19日、25日の記事を引き継ぎ、ここでは釜山の金井山一帯の無許可庵子について言及し、ムーダンの儀礼も批判。
9/30	自然も健全意識もむしばむ 「信仰無法」 の現場 (8)	記者	「自然も健全意識もむしばむ信仰無法」シリーズとして、この記事では大邱の八公山一帯の迷信行為を批判し、ムーダンの儀礼も糾弾。

10/3	三角山・ 仁王山周辺 自然毀損	記者	ソウルの三角山と仁王山周辺の自然を毀損したという容疑で、ムーダン数名を逮捕したことを伝える記事。
10/13	朴大統領指 示・自然保護	記者	朴正熙大統領が会議において、自然保護の観点から、全国に散在する無許可施設を撤去するよう指示したことを伝える。
10/14	自然は復元さ れなくては	記者	社説として自然保護の必要性を訴えながら、自然環境を毀損するものとして、ムーダンの儀礼についても言及。
11/14	韓国舞踊団人 気伊紙、ムー ダン踊り激賛	記者	韓国舞踊団の海外公演に関する記事のなかで、とりわけイタリアの新聞において、ムーダンの踊りに高い評価が与えられたことを伝える。
11/25	儀礼をしてい たムーダン、 卒倒死	記者	病気を治してやると儀礼をしていたムーダンが、儀礼の最中に高血圧で死亡したことを伝える記事。
12/2	6番目の チャンス	扈英頌 (作家)	作家によるコラムとして、ある女性が息子を産むことができず苦しむ場面について話しながら、卑下するニュアンスでムーダンについても言及。
12/4	全国山中不法 建物2万 400余棟	記者	全国に散在する不法建築物が次年度に撤去されることを伝える記事として、ムーダンの家も同じく撤去予定であると述べる。
12/8	無所属/資金攻 勢監視	記者	選挙に関する記事であり、与党議員の言葉として、無所属候補が与党議員に対して資金攻勢をしかけていると批判しこれを監視していると言及、発言のなかで無所属候補たちがムーダンの預言までも利用していると指摘。

表を通してまず目につくことは、2月20日、9月19日から10月14日、そして12月4日の記事において、自然を蝕むという論理で巫俗を批判していることである。この中で、2月20日の記事内容は、韓国の近代化を考える上で重要な意味をもつ。記事では、全羅南道光州の無等山において起こった悲劇的な事件の判決を伝えているが、この事件で起訴された犯人は「ムーダンの家族」として汚名を着せられ、社会から排除された結果として、殺人を犯すに至った。山林保護、そしてセマウル運動などの余波で社会的弱者が住む場所を奪われ、死刑に処されたことに関して、当時の韓国社会はその構造的な問題を自覚できずにいた。

「自然も健全意識もむしばむ信仰無法の現場」というシリーズは、国家が進める山林保護政策に新聞社が便乗した記事だと言えよう。10月13日の記事から確認できるように、新聞社による積極的なキャンペーンにより、遂には大統領まで出てきて無許可施設の撤去を命じることとなった。自然保護という論理で巫俗を批判することは、その前の時期には見られなかったものである。セマウル運動とはまた異なる批判の論理として、巫俗を否定する社会的雰囲気は依然として維持されていたことを物語っている。

1972年はセマウル運動、1978年は環境保護という論理のもと否定的に捉えられていた巫俗だが、他方で、文化公演や催しにおいて巫俗の文化的要素が肯定的に扱われる傾向は維持された。1月10日、2月14日、5月31日、8月3日、11月14日の記事は、公演においてムーダンの踊りが発表されたことを伝えている。とりわけ、11月14日の記事では、ムーダンの踊りを世界に誇れる文化的遺産として語っており、また7月19日(a)の記事では、巫俗儀礼の代表格でもある「シッキムクツ」が大々的に上演されたことを述べている。

1978年は、ムーダンの踊りの他にも、多様な分野において巫俗の文化的側面が強調された時期でもあった。たとえば3月6日の記事では、韓国文学の巨頭である金東里による『乙火』が発表されるのにあわせ、巫俗についてもその文化的意義を詳細に説明している。『乙火』はムーダンである母親とキリスト教徒である息子の葛藤を軸に、巫俗がもつ宗教的世界観を深く掘り下げた作品であるが、ドラマ化・映画化され、社会の多様な領域において巫俗の価値を押し上げる役割を担った。

1970年代は巫俗を取り巻く社会的環境が大きく変化した時代であった。大きな流れとして、セマウル運動や環境保護の観点から巫俗を糾弾しようとする視点が強く台頭した時期であった反面、巫俗がもつ文化的及び宗教的価値が再考された時代でもあった。国家が先頭に立って巫俗を迷信として批判するという構造に関して、1960年代と1970年代の間に大きな違いは見られない。しかし、研究者のみならず、舞踊を中心として、いわゆる知識人たちも巫俗がもつ文化的及び宗教的価値に自覚的になっていったという点に、1970年代の特徴がある。

迷信と文化の共存、これが1970年代の巫俗言説を構成する軸であった。このような構造は、1980年代に入ると新しい局面を迎えるようになる。下では、1970年代において見られた巫俗に対する視点が、1980年代に入るとどのように変化していったのかを確認する。

(5) 巫俗を迷信とみる視点の弱体化

1980年代の巫俗関連記事は、巫俗を迷信としてみる視点がほとんど見られなくなり、代わりに巫俗の文化的および宗教的側面を強調する内容が急増する点に特徴がある。この点を押えるために、まずは1981年の記事を見てみよう。

表8: 『東亜日報』 「ムーダン」 検索結果 (1981年)

日付	題目	作者	内容
1/1	コリアンの 脈拍	記者	世界の韓国人たちの生活を伝えるシリーズ。ムーダンや占い師もいるコリアンタウンの姿を伝える。
1/12 (a)	韓国人、青・ 緑色が好き	記者	高麗大学の修士論文の内容を紹介しながら、韓国人が好きな色を説明、ムーダンの服(巫服)についても言及。

1/12 (b)	張美姫嬢 防衛誠金	記者	KBSのドラマである『乙火』にムーダンの役で出演した俳優が、国防のための募金として防衛誠金したことを伝える。
1/19	韓国人の顔、 仮面 (1)	金烈圭	人類学者による仮面劇に関するコラム。仮面劇について述べながら、ムーダンの儀礼についても言及。
1/28	韓国人の顔、 仮面 (8)	李相日	演劇評論家によるコラム。この記事では仮面劇にも出てくる役の一つである小巫について、その由来と民俗的要素について説明。
2/5	ハワイ大附設 韓国学研究所 セミナー「伝 統文化の根っ こは巫俗」	記者	ハワイでの学術セミナーにおいて、演劇学を専攻する金雨玉などの研究者の発表があり、その主題が巫俗であったことを伝える。
2/24	全北サンゴル 筆峰村	記者	農楽講演会に関する記事。そこで発表される農楽を発掘したチームの一員が世襲巫・金淑子であったことを伝える。
3/24	言語を超越し た韓国演劇	マイ ケル・ コピー	外国人の演劇評論家が韓国演劇について述べながら、感銘深かった経験として、ムーダンの家を訪ねたことを挙げる。
3/25	知っていなが らも実行が難 しい農民の 健康知識	記者	地方における医療の実態に関する調査から、ムーダンを呼んで儀礼をさせることを迷信行為として批判。
4/15	民俗芸術観 覧、簡単に なった	記者	民俗芸術を観覧できる場所として「韓国の家」および韓国民俗村について紹介する記事であり、そこでムーダンである禹玉珠による巫俗儀礼が公演されることを伝える。
4/30	世界に照らし 出された韓国	ウォル ラベン	韓国学を専攻する外国人研究者たちが韓国の古典文学を議論する連載記事。記事の中で昔の職業の一つとしてムーダンを挙げる。

	(7)		
5/6	私の交遊歴/元老女流家による回顧 (83)	ト恵淑	女性俳優による回顧録。『防疫』という映画の主題が、ムーダンを呼んで儀礼をさせるのではなく、病気になったらちゃんと医者にかかって薬を飲まなくてはならないことを伝える点にあったことを述べる。
5/15	フランス最高の知性「レヴィストロース」が来る	記者	フランスの学者、レヴィストロースが来韓し、ムーダンの儀礼を見る予定であることを伝える。
6/5	エクソシスト 2/ ムーダン	広告	映画の広告。
6/13	世界に照らし出された韓国 (11)	ヴェルナー・ザッセ	4月30日の記事を引き継ぐ連載記事として、ここでは韓国巫俗を専攻する外国人教授が巫俗について詳細に説明している。
6/16	欲情と復讐の土俗的エロ物	記者	ムーダン役が登場する映画『避幕』についての説明。
7/6	国立舞踊団	記者	日本において国立舞踊団の公演があることを伝える記事。ムーダンの踊りも披露される予定であることを述べる。
7/9	車輪の鬼神は出ていけ	記者	ソウルにおいて交通事故が多発し、住民がムーダンを呼んで儀礼をさせたことを報道。
8/21	「避幕」ベネチア映画祭で本選進出	記者	6月16日の記事でも紹介された映画『避幕』が、ベネチア映画祭で本選進出したことを伝える記事。
10/8	インタビュー	記者	レヴィストロースに対するインタビュー記事、記者が韓国巫俗についてどう思うかと尋ねたところ、シャーマニズム研究の重要性を述べる。
10/22	寡婦の八字	記者	ムーダン役が登場するドラマのあらすじを述べる。

10/24	第22回民俗競 演大会	記者	全国各地の民俗芸術が集まって競う「全国民俗芸術競演大会」において、多くの巫俗儀礼が発表・表彰されたことを伝える。
11/2	巫俗は文化理 解の尺度	記者	高麗大学において、巫俗を主題とした学術会議が開かれたことを伝える記事。多くの巫俗研究者が登壇したことも述べる。
11/6	伝統舞踊 発表会に臨む 金淑子氏	記者	世襲巫であると同時に舞踊家でもある金淑子が主催する伝統舞踊個人発表会について紹介する記事。
11/23	中共において 「幸運」 求めて死者と 結婚風習	記者	中国（中共）において依然として迷信を信じる者が多く、その一つの例として、死者結婚の風習があることを伝える。
12/5	不安な情緒に リズムを つけよう	記者	韓国舞踊研究会の学術シンポジウムの内容を紹介する記事。ムーダンの儀礼が演劇的要素を有していることを述べる発表があったと伝える。

外国で起こった出来事に関する報道も含めて、巫俗を否定的に描くものとして3月25日、5月6日、11月23日の記事をあげることができる。これと合わせ、1981年の出来事ではないが、1980年代初頭は全斗煥政権による社会浄化政策が推進され、巫俗は社会に巢食う不条理の代表格として、いま一度厳しい立場に追い込まれた¹⁰。また、1980年代はソウルオリンピック（1988年）が開催されるのに合わせ、公式行事として、韓国の民俗的象徴である「長生」という村の守護神（男女一対の木像）をテーマに催し物が企画されたが、キリスト教団体がそれを「シャーマニズム的」あるいは「偶像崇拜」として批判したため、行事が中止されるという出来事も起こった¹¹。巫俗を否定的に捉える視線は、1980年代においても社会的に依然として根強いものがあったのである。

しかし、1980年代の巫俗関連記事全体のなかで、巫俗を迷信とみなし、これを批判しようとする論調は確実に少数派に属すものであったと言わざるを得ない。前述した通り、これは巫俗を迷信とみる視点が社会から消えたことを意味するのではない。ただ、1980年代になると、巫俗の文化的及び宗教的価値を認め、これを高く評価しようとする論調が圧倒的に優勢に立つようになったことは否定できない事実である。

たとえば、ムーダンの踊りを始めとして、舞踊と巫俗を関連付ける内容としては、7月6日、10月24日の記事がこれに該当し、学術的に巫俗の文化的側面を扱うものとしては、1月19日、1月28日、2月5日、

¹⁰ 「似而非宗教・巫俗行為取締り」、『東亜日報』、1980年8月11日。

¹¹ 「オリンピック選手村・長生祭論難、宗教界反発で中止され、民俗学者が強く批判」、『中央日報』、1988年7月28日。

11月2日、12月5日の記事を挙げるができる。学術的に巫俗を扱うものうち、2月5日、11月2日の記事で述べられている学術大会は巫俗を主題とするものであり、「根っこ」や「文化理解の尺度」という言葉で巫俗を形容し、巫俗が学術的に重要な主題として認識されていたことを伝えている。5月15日、10月8日の記事に見えるように、レヴィストロースが来韓し巫俗儀礼を鑑賞したという事実も、学術研究において巫俗の価値が再考される役割を担ったことと考えられる。

他方、1980年代は、巫俗の文化的小および学術的価値について言及する主体として、学者や知識人、舞踊家のほかにも、ムーダンたち自身が巫俗について語るようになったという点に特徴がある。4月15日の記事では禹玉珠、2月24日と11月6日の記事では金淑子が登場する。彼らは韓国に数多く存在するムーダンのなかで、いわばその宣伝役としてきわめて重要な役割を担った人物であった。1970年代において、巫俗を語る主体のほとんどは学者や文化人であった。これに対し、1980年代に入って巫俗への社会的関心がより一層高まることで、巫俗の当事者であるムーダンたちが積極的に社会の表舞台に立って巫俗について語る事が可能になった。このような傾向は、1980年代後半になるとより顕著になる。本稿の最後の作業として、下では1987年の記事を参照してみよう。

(6) 巫俗を宗教とみる視点の確立

1980年代の巫俗関連記事の仕上げとして、『京郷新聞』1987年の記事を確認する。

表9: 『京郷新聞』 「ムーダン」 検索結果 (1987年)

日付	題目	作者	内容
1/9	息子と宗教が 異なり葛藤/特 選邦画	記者	ドラマ『乙火』のあらすじを伝える記事であり、ムーダンである母親とキリスト教徒である息子との葛藤を描く。
1/16	ソウルに ムーダン学校	記者	ムーダンである禹玉珠が設立した「韓国巫俗研究所」が大変な人気であること、そして韓国文化に対する関心が主婦、学生、外国人など多様な層の間で高まっていることを伝える。
2/6	「クッ」シリ ーズを出刊し た写真作家・ 金秀男氏	記者	巫俗儀礼であるクッを15年間撮り続けた写真作家・金秀男が写真集を刊行するにあわせ、巫俗についても詳細に論じる記事。
2/19	88芸術団/ 初舞台	記者	88芸術団の発表会に関する記事であり、オペラの演目である「ムーダン」についても言及。

2/23	悲歌うたえば 悲しい運命に	記者	歌の言葉研究会会長の論文を紹介する記事であり、ムーダンや占い師が悲しい歌を歌うと、悲しい霊が降りてくると述べる。
2/27	劇中夫婦として出演した二俳優	記者	演劇「四柱八字、直そう」で主人公とその妻のムーダン役で出演した二人の俳優が、実際に結婚することになったことを伝える。
3/5	伊・作曲家、メノティー21 日来韓公演	記者	イタリアの作曲家が来韓、そこで公演されるオペラについて伝える記事のなかで演目「ムーダン」にも言及。
3/6	来韓したメノティー氏	記者	上の記事と同じく、来韓したイタリアの作曲家についての記事のなかで、演目「ムーダン」についても言及。
3/14	元老音楽人/意欲の春舞台	記者	元老級のアーティストたちが活発な芸術活動を行っていることを伝える記事、オペラ「ムーダン」についても言及。
3/19	11時に会いましょう	記者	イタリアの作曲家・メノティーが出演するテレビ番組に関する記事。オペラ「ムーダン」についても言及。
3/20	週間生活カレンダー	記者	多彩な文化行事について伝える記事のなかで、オペラ「ムーダン」についても言及。
4/11	テレビ文化館	記者	ドラマのあらすじとして、ムーダン役も登場することを伝える。
4/23	グレータ李の伝統ファッション	記者	舞台衣装のデザイナーによる発表公演に関する記事であり、ムーダンの踊りについても言及。
5/30	テレビ文化館	記者	ドラマのあらすじとして、ムーダンも登場することも伝える。
6/11	朴成寿教授の檀君紀行 (22)	朴成寿 (歴史学者)	朴成寿が行ってきた調査をもとに、朝鮮の始祖神である檀君について集中的に論ずる連載記事。巫俗は檀君信仰の残骸として重要ではあるが、現存する巫俗は墮落してしまったものだと述べる。

7/31	在日同胞 朴貞子氏	記者	舞踊家である朴貞子の公演について伝える記事のなかで、ムーダンの踊りについても言及。
8/22	故郷・タルム ゴルを探すク ワンジュン	記者	テレビ番組・日曜推理劇場のあらすじとして、ムーダン役が登場することを述べる。
8/25	建設会社常務 が的中の占い 師に	記者	建設会社で常務として働いていた男性が、霊山・鶏龍山での降神体験を経て、ムーダンになって占いをしていることを伝える。
9/2	舞踊界/伝統巫 俗再現活発	記者	舞踊界において巫俗関連公演が多くなっていることを伝える記事。民俗学者や写真作家など、巫俗に関する研究・発掘を進めてきた人物たちについても言及。あわせて国巫として名高い金錦花も登場。
9/9	延雲景/ムーダ ンの踊りを学 ぼうと脂汗	記者	ドラマ『伝説の故郷』に出演する俳優が、役作りのため世襲巫・金淑子のもとでムーダンの踊りを学んでいることを伝える。
9/11	インタビュー	記者	巫俗儀礼を現代化するための活動を行っている俳優へのインタビュー記事。巫俗やその儀礼に関して詳細に述べる。
9/19	文化の道 (14)	記者	江陵の文化を集中的に扱う記事として、ムーダンの踊りについても言及。
9/25	朴成寿教授の 檀君紀行 (36)	朴成寿	6月11日の記事から続いて、ここでは日本に残っている檀君関連文化遺跡について述べながら巫俗にも言及。
9/26	私の故郷/興と 粹の庭	記者	第28回全国民俗芸術競演大会に関する記事。済州島の巫俗儀礼が受賞したことを伝える。
10/1	4320年 開天節記念	記者	開天節についての行事を伝える記事のなかで、ムーダンの踊りも公演で発表される予定であることを述べる。
10/2	朴成寿教授の 檀君紀行 (37)	朴成寿	檀君に関する連載記事として、朝鮮の文化遺跡について述べながら檀君信仰と巫俗信仰の関係性にも言及、ただ、巫俗それ自体が檀君信仰ではない

			と強調。
10/8	定着していく 民俗芸術	朴東奎	文化評論家によるコラム。民俗芸術について述べながら、巫俗舞踊やその世界観にも言及。
10/24	文化の 道 (18)	記者	9月19日の記事をうけて、ここでは安東文化会館の実践として各種宗教団体が会議などで使える場所を提供していること、そしてその中にムーダンたちの団体もあることを伝える。
11/11	人と人	記者	珍島の巫俗儀礼の保有者とその伝承者がテレビ番組に出演し、巫俗信仰について述べる予定であることを伝える。
11/27	私だけが できる	読者	大統領選挙についての読者の投稿文を集めた記事。その中で候補者たちを卑下する言葉として「ムーダン」と述べる。
12/1	現金つかむ前 には「絵の餅」	丁康絃	証券業協会弘報室長によるコラム。証券に関する話題から、比喩としてムーダンについても言及。
12/17	国立現代 美術館	記者	国立現代美術館が保有する作品について伝える記事であり、「ムーダン」という作品があることも言及。

表を通して、巫俗と韓国文化を関連付けて行われる公演や催し物の種類が、たいへん多様になったことがわかる。たとえば9月2日の記事では、ムーダンである金錦花の他にも、多くの民俗学者、写真作家が登場し、彼らの協力のもと、古くから伝わる伝統舞踊の復元が図られていることを述べている。むろん、前述したように、1970年代の段階でもムーダンの踊りに関して言及する主体は存在したし、学会などで巫俗を主題とすることは、1960年代から確認できる現象であった。しかし、ムーダン、研究者、文化人などが協力し、巫俗の文化的価値を発掘しようとする試みは、1980年代になってこそ可能になったと言えよう。

ここで一つ注目したいことは、1980年代になると、巫俗という宗教現象に深く切り込み、その文化的側面だけでなく、宗教的世界観などにも目を向ける論調が目立つようになった、という点である。1月16日、2月6日、8月25日、9月2日、11月11日の記事ではすべてムーダン、あるいはムーダンと共に活動してきた学者や文化人が巫俗について直接語っている。彼らの巫俗についての視点は、巫俗の文化的側面よりも、現存する巫俗を重視するという点に特徴がある。すなわち、韓国文化の源泉としての巫俗ではなく、生きられている宗教として、巫俗と正面から向き合おうとする姿勢があらわれている。巫俗の文化的側面について言及する際、しばしば使われる論法として、その「歴史性」を強調するものがある。現存する巫俗は迷信であるが、それは韓国文化の源泉、歴史の淵源としての意味をもつため価値がある、という論法が駆使されたのである。巫俗を迷信と見なし、否定しようとする視点は長い歴史を持つものである。そのため、文化公演などで巫俗について語る場合、これを正当化する論理が要請されるわけだが、歴史性を重視する視点は、迷

信としての巫俗認識と論理的に共存可能なものであった。

反面、ムーダンたちによって繰り広げられる儀礼、そしてそこから見出される宗教的世界や救済観を重視する姿勢は、現存する巫俗を全面的に肯定する視点へと連結される。歴史性ではなく、生きられている宗教としての巫俗を重視し、そこで人々がいかなる苦痛を経験し、癒されているかを直視しようとする巫俗認識である。巫俗を文化ではなく宗教として見ようとする視点は、長年にわたって巫俗の現場を訪れ、ムーダンたちと交流してきた一部の研究者にみられることが多かった。また、研究者ではなくとも、2月6日の記事に登場する金秀男のように、カメラを通して巫俗に深く入り込んだ主体も、同様に巫俗の宗教的な側面を強調していった。巫俗を宗教とみなす視点は、1980年代になると新聞紙上でも頻繁に見出されるようになった。宗教としての巫俗認識が台頭したことは、1960年代から本格化した巫俗研究が、長年の蓄積を経て深化していった結果だと考えられる。

巫俗を宗教と見る視点は、しばしばこれを文化と見る視点と衝突する傾向があった。この点を確認する上で、まずは1987年の記事において、巫俗を文化とみなす視点がどのように反映されていたかを確認してみよう。文化公演や催し物においてムーダンの踊りが発表されることは、この時期になると日常の風景として定着していた。2月19日、3月5日、3月6日、3月19日、3月20日の記事ではオペラ「ムーダン」について言及しており、ムーダンの踊りに関しては4月23日、7月31日、9月9日、9月19日、9月26日、10月1日、10月8日の記事から確認できる。

巫俗を文化とみるか、宗教とみるか、という点について考える際、興味深いのは檀君と巫俗との関連について論じている歴史学者・朴成寿による連載記事である。彼は6月11日、9月25日、10月2日の連載記事で檀君と巫俗について語っているが、ここでは巫俗を文化とみる視点が強く反映されている。すなわち、巫俗の歴史性については価値を認めるが、「残骸」や「墮落」などの概念を用いて、巫俗の現在性、つまり現存する宗教としての巫俗は否定しようとする意見が表明されている。ここに巫俗を「宗教」とみる視点と「文化」とみる視点の分岐点が見出せる。

巫俗を文化や民俗といった概念で理解しようとする際、そこで重視されるのは韓国文化・民俗の源泉としての巫俗であり、歴史性に重点が置かれる。他方、現存する巫俗儀礼の価値を認めようとする視点は、歴史性ではなく宗教性、救済観などを巫俗の核心とみる。これらは相互に通じる面もあるが、究極的には相容れない姿勢である。巫俗を文化とみなす視点は、内容上、これを迷信とみる視点と両立可能であるのに対し、宗教とみる視点は巫俗を迷信視する姿勢に徹底抗戦する構えを有する。1980年代までの韓国社会において、やはり優勢なのは巫俗を文化と見る視点であった。それはこれまで確認してきた記事のなかで巫俗の宗教的側面について述べる主体よりも、文化的側面について述べる主体が圧倒的に多かったという事実からも確認できよう。しかし、少数ながらも、巫俗の文化的側面からさらに一步踏み出し、その現在性、宗教性にまで目を向けた主体が存在したことは、韓国社会における巫俗認識を捉える上で重要な意味をもつと考えられる。

一例として、2000年代に起こった出来事を一つ確認してみよう。著名な歴史学者である李基白は、自らの著書のなかで巫俗について以下のように述べている。

巫術信仰が本当に生命力がある宗教であったのなら、逼迫と賤待によって世俗化することはなかったであろう。要するに、完全に祈福的な信仰として転落してしまった巫術信仰は、すでに今日の韓国社会において、宗教的な使命をやり遂げる能力を喪失してしまったのである。[李基白 2002 : 19]

李基白は、韓国文化の源泉としての巫俗には意味があるが、現在の巫俗には何ら再考すべき価値が見出せないという主張を提起した。これに対し、当時巫俗研究を精力的に進め、その宗教的世界観に注目していた

研究者らは一斉に異議を唱え、学会を巻き込んだ一大論争が展開された¹²。李基白は、現在の巫俗は「転落」してしまった価値が低いものであるが、その歴史性には価値があるとする見解をみせた。巫俗の歴史性を強調する視点は、これを迷信とみなす視点と共存可能であることが確認できる。反面、巫俗の宗教性に価値を置く視点は、現存する巫俗の価値を認めない見解とは共存できない性格をもつ。巫俗を文化とみるか、宗教とみるか、これらは巫俗を肯定的に捉えているという点において似通ったものと言えるが、その内容面に深く切り込んでみると、異なる性格をもつものであったことがわかる。

研究者たちは解放後の大変早い時期から巫俗研究を推進し、それが巫俗を文化とみる視点の源泉になった。反面、研究者のなかには、巫俗の宗教的な側面に魅せられ、その現在性を重視する者も登場することとなった。巫俗の宗教性について自覚的に述べようとする見解は、究極的にはその歴史性にのみ価値を置く視点とは共存不可能なものであった。朴成寿による連載記事では、巫俗を文化とみなす研究者が、これを宗教とみる視点を否定しようとする姿が確認できる。だが、反対に、巫俗の宗教性を強調する視点から、その文化的側面にのみ価値を置く視点を否定しようとする動きもまた、広く見られるものであった。巫俗を文化とみるか、宗教とみるか、という問題は、現在の韓国においても未だ解決されていない課題として残っており、巫俗について意見を表明する際、しばしば見解の衝突を招く要因としてあり続けている。

4. おわりに

植民地時代を基点として、1980年代までの時期に、巫俗がどのように言及されてきたのかを確認した。結果、およそ1950年代まで、巫俗はほぼ一貫して迷信として語られていたものの、1960年代になると、巫俗を迷信とみなす認識が優勢を占めるなかで、研究者を中心として、その文化的側面に注目する動きが台頭し始めたことが確認された。また、1970年代は、迷信と文化としての巫俗認識が共存し、1980年代は、迷信とみる視点が少数派になり、文化または宗教とみなす視点が優勢を占めるようになったことを指摘した。

本稿は新聞記事をもとに、巫俗認識が植民地時代以降、どのような変化を経験したのかを考察したものである。これまで述べてきたように、多様な巫俗認識を捉えようとする際、軸となるのは迷信、文化、宗教という三つの概念であると考えられる。むろん、これら三種類の概念は、使われる方法によってより広い意味を持ちうる。しかし、巫俗を否定する概念としての迷信、迷信と共存可能でありながら巫俗の歴史性を強調する文化、現存する巫俗を肯定して迷信および文化としての視点と衝突する宗教としての巫俗認識、という三つの軸は、巫俗の歴史を描き、その意味を捉えようとする際に重要な意味を持つと考えられる。とりわけ、ほぼ迷信としてのみ語られていた植民地時代と違い、巫俗について多様な見解が披露されるようになる1960年代以降の動きに関しては、これをより体系化してその意味に深く切り込んでいく必要がある。本稿はこの課題に取り組む上で「文化」と「宗教」としての巫俗認識という構造を提示したが、このような図式は、近現代の巫俗認識を体系的に捉える上で嚆矢としての意義をもつと言えよう。

本稿は、近現代の韓国社会における巫俗認識の変化を概略的に捉えようとしたものである。そのため、巫俗について語った主体やその内容に関して、今後はこれを深化させていく作業が求められる。激動の韓国近現代史のなかで巫俗が歩んできた道のりを丹念に描き出すことは、宗教学におけるシャーマニズム研究のみならず、韓国の近代化、そして隣国として韓国と付き合ってきた日本の経験を再考する上でも、貴重な比較の材料を提供してくれるものと予想される。

¹² この論争に関しては、次の記事でも紹介されている。「巫術、族譜は不必要」、『聯合ニュース』、2003年1月22日。<http://entertain.naver.com/read?oid=001&aid=0000308752>

参考文献

[日本語文献]

- 赤松智城・秋葉隆 1937-38 『朝鮮巫俗の研究』上・下、大阪屋號書店。
- 川瀬貴也 2015 「近代朝鮮における『宗教』ならざるもの—啓蒙と統治との関係を中心に」江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛』上巻、リトン。
- 玄容駿 1985 『済州島巫俗の研究』第一書房。
- 崔吉城 1980 『朝鮮の祭りと巫俗』第一書房。
- ジークフリート・イェーガー 2010 「談話と知—批判的談話分析および装置分析の理論的、方法論的側面」ルート・ヴォダック、ミヒャエル・マイヤー編著『批判的談話分析入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』野呂香代子監訳、三元社。
- 真鍋祐子 1997 『烈士の誕生—韓国の民衆運動における「恨」の力学』平河出版社。
- 宮内彩希 2012 「韓国併合前後における『迷信』概念の形成と統治権力の対応」『日本植民地研究』24、日本植民地研究会。

[韓国語文献]

- 『京郷新聞』京郷新聞社。
- 『東亜日報』東亜日報社。
- 『中央日報』中央日報社。
- 金光億 1991 「抵抗文化と巫俗儀礼—現代韓国の政治的脈絡」『韓国文化人類学』23(1)、韓国文化人類学会。
- 金錦花 2014 『万神金錦花』クンリ出版。
- 李基白 2002 『韓国伝統文化論』一潮閣。
- 李龍範 2005 「巫俗に対する近代韓国社会の否定的視角に対する考察」『韓国巫俗学』9、韓国巫俗学会。

略 歴

氏名：新里 喜宣

[学歴]

2006年：東京外国語大学外国語学部東アジア課程朝鮮語専攻卒業

2008年：東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程修了

2013年：ソウル大学大学院人文大学宗教学科博士課程修了（単位取得）

2014年：東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程単位取得満期退学

2018年：宗教学博士（授与大学：ソウル大学校）

[経歴]

2009年：日本学術振興会特別研究員（DC2）

2011年：韓国国際交流財団韓国語フェロー

2011年：大韓民国政府大学院招請奨学生

2015年：日韓文化交流基金訪韓フェロー

2016年：日本学術振興会海外特別研究員

2018年：日本学術振興会特別研究員（PD）（現）